JELS2009

Japan Education Longitudinal Study 2009

●青少年期から成人期への移行についての追跡的研究●

目　次

JELS 研究会メンバー、JELS 事務局連絡先

１．JELS について
　１）調査研究の趣旨と社会的意義
　　目的と必要性
　　問題枠組
　　JELS の特徴
　　教育困難と対処のモデル図
　　調査研究の社会的意義
　２）JELS の調査設計
　３）調査内容
　　質問紙調査
　　学力調査
　　教員対象ヒアリング調査
　４）学力調査の特徴
　５）研究成果とデータの還元
　　資料　結果速報（パンフ）例
　６）人権・プライバシーへの配慮

２．JELS2003、JELS2006 調査と研究成果
　１）JELS2003、JELS2006 調査の概要
　　Ａエリア　関東地方
　　Ｂエリア　東北地方
　　Ｃエリア　東北地方
　　お茶の水女子大学附属学校
　２）研究成果
　　刊行報告書
　　これまでの知見（一部）
　　雑誌・新聞

資料　グローバル COE プログラムについて

JELS2009

お茶の水女子大学グローバル COE プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」（平成19 年度採択、拠点リーダー：耳塚寛明）

JELS 研究会メンバー

耳塚 寛明　お茶の水女子大学　グローバル COE 拠点リーダー、JELS リーダー、理事・副学長
王 杰　お茶の水女子大学　人間発達教育研究センター　特任講師
垂見 裕子　お茶の水女子大学　人間発達教育研究センター　特任助教
岩崎 香織　お茶の水女子大学　教育研究特設センター　アソシエイト・フェロー（AF）
蟹江 教子　お茶の水女子大学　教育研究特設センター　リサーチ・アシスタント（RA）
中島 ゆり　お茶の水女子大学　研究員
中西 啓喜　お茶の水女子大学　研究員

大多和直樹 東京大学　大学総合教育研究センター　助教
堀 有喜衣　独立行政法人 労働政策研究・研修機構　副主任研究員
寺崎 里水　福岡大学　人文学部　教育・臨床心理学科　講師

研究協力者
阿部 昇　秋田大学 教育文化学部　教授
松下 佳代　京都大学　高等教育研究開発推進センター　教授
冨士原 紀絵　お茶の水女子大学　文教育学部　准教授

JELS 事務局 連絡先
E-mail　jelsocha@cc.ocha.ac.jp
TEL/FAX　03-5978-5935
Address　112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学グローバル COE 事務局内
HP　http://www.li.ocha.ac.jp/hss/edusci/mimizuka/JELS_HP/index.htm

1. JELS について

1）調査研究の趣旨と社会的意義

JELS は、学齢期から成人期までを対象とした、わが国で初めての本格的な追跡研究です。

目的と必要性

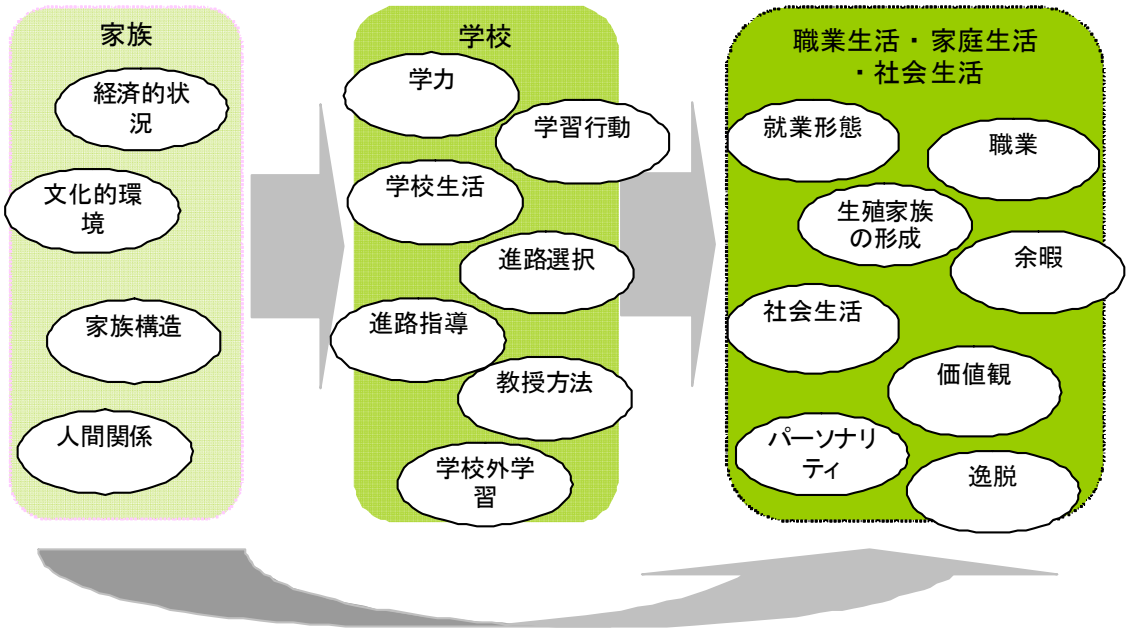
JELS は、人間の生涯の発達過程の中で、小学校から成人期の入り口を経て、職業生活の初期段階までの長期にわたる過程を対象としています。子どものさまざまな発達の態様（学力・能力、アスピレーション、進路、学歴、職業、地位達成）と、家族、学校教育、学校外教育、社会文化的環境との相互作用を包括的な枠組みによってとらえることが目的です。

21 世紀初頭の変動社会におけるトランジッション・教育システムの“危機”は、つぎのような次元で見られます。

①社会化（学力・能力・パーソナリティ形成）の危機　→　学力低下や引きこもり
②人材の選抜と配分（職業世界への円滑な移行）の危機　→　フリーターや無業者の増加
③社会化と選抜・配分を通した平等社会の実現における危機　→　社会格差の拡大

どの現象も成人期への円滑な移行という観点から見て、そのあり方を再検討することが必要とされています。子どもの発達過程について縦断的な研究は、これらの危機の諸相を、家族や学校、学校外教育などのマクロな社会文化的環境との関わりにおいて考え、危機を克服するための教育システムを構築する処方箋を描くうえで、必須なものです。

問題枠組



JELS の特徴

①追跡研究（縦断的調査）

同じ青少年を、学齢期から成人社会まで追跡します。

②定点観測（横断的研究）

同じ地域、同じ学校の児童生徒を時系列的に調査し、青少年と学校教育の定点観測を行います。

③トランジッション（移行）研究

小学校低学年から高学年へ、小学校から中学校へ、中学校から高校へ、高校から実社会、あるいは高等教育へ、学校から職業世界へ。さまざまな青少年問題を、そうした「トランジッション（移行）危機」としてとらえ、危機を克服する処方箋を探ります。

④多様な「学力」の測定

指導要領に準拠した「学業達成」だけでなく、パフォーマンス・アセスメント（performance assessment: PA)、新学力観に基づく学力など、多様な「学力」の測定を試みます。

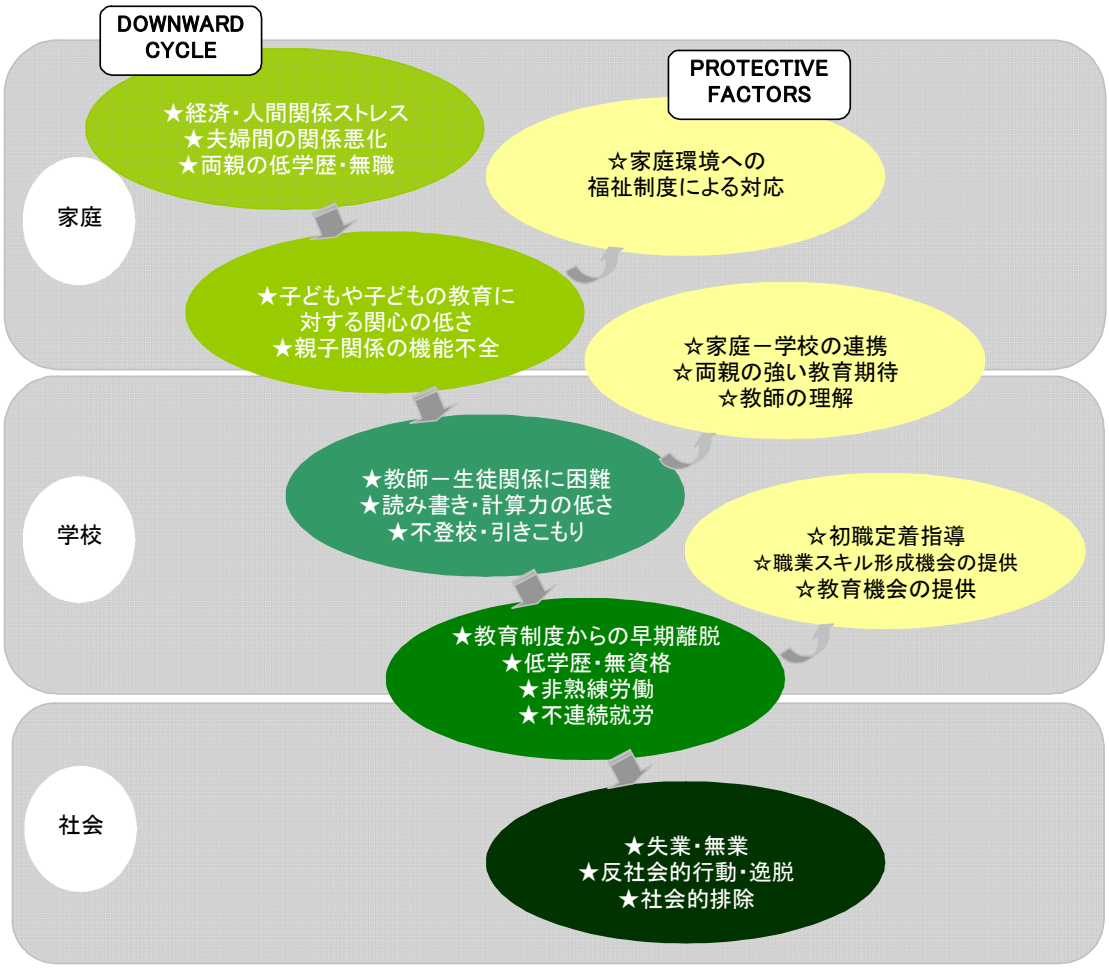
⑤社会・文化的要因の探求

青少年の発達と、学校教育、家庭、労働市場などとの相互関連を、社会学的に探求します。とくに、学校における学習指導・適応指導・進路指導との関わり、家庭教育や家庭環境との関連、就職支援のあり方などを重視します。

⑥社会及び実践現場への研究成果の換言

得られたデータを学術研究のために公開し、学校教育を中心とする実践現場にフィードバックして、臨床的な問題解決をするための方途を探ります。

教育困難と対処のモデル図



調査研究の社会的意義

①キャリア教育への提言

1990 年代を通じて、それまで円滑だった学校から職業世界への若者たちの移行メカニズムにほころびが生じてきました。たとえば、高校段階では 1 割強の生徒たちが、不安定な労働条件のフリーターとして学校と職業世界の狭間にさまよい出て行っています。JELS は、変動する労働市場に適合的な教育システムや指導・社会的支援のあり方を提言していきます。

②学力格差の状況と原因を探る

マスコミを舞台として、いわゆる学力低下論が主張されています。青少年の学力の実態を継時的にとらえるための基礎的データの収集を通じて、学力低下の事実そのものを検討するとともに、家庭的背景による学力格差の状況と格差の出現メカニズムについての実証的なデータを収集します。文部科学省などの行政による学力調査は大規模ですが、学力格差の原因を探ろうという視点はありません。その検討は研究者にしかできないものなのです。

③子どもの将来への学力の影響を探る

これまで、人々の社会的地位達成のあり方を決める上での学力の重要性は認識されていながら、学力の形成とそれが分化するメカニズムは十分に明らかにされてきたとは言えません。また、小さいころの学力がどの程度、その後の地位達成を約束することになるのかについてもあまり研究されていません。

④子どもの将来への家族の影響を探る

学力形成、学歴獲得、職業獲得、社会的地位達成にとって、「家族」は基本的な重要性を持っています。しかし、これまでの研究の多くは、家族の経済、文化、家族構造について、きわめて限られた側面しか考えてきませんでした。本研究では、保護者からのデータという信頼性の高いデータを集めることによって、これらの側面を総合的に明らかにしていきます。

⑤教育政策の影響を探る

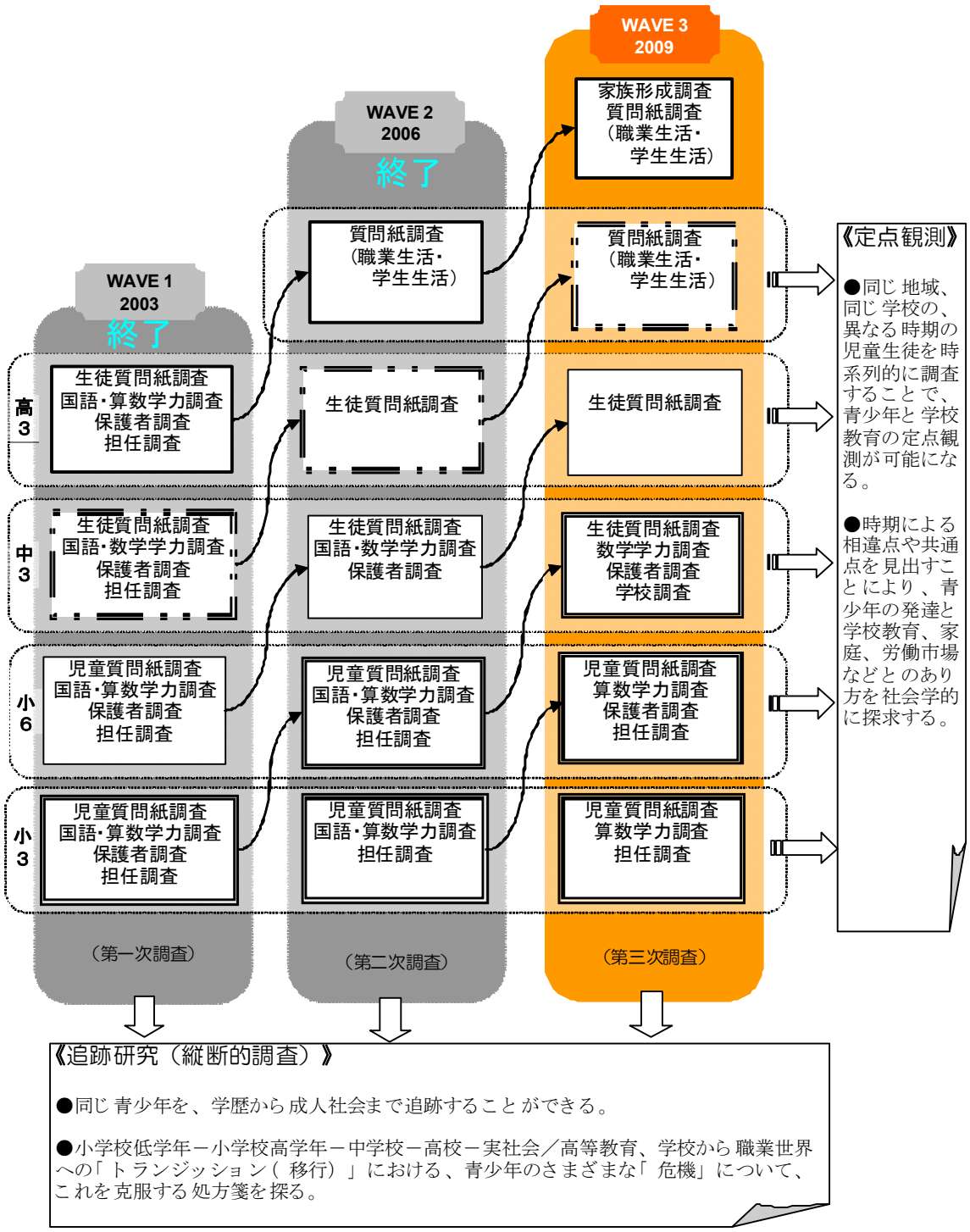
現下の教育政策は、「ゆとり教育」路線と「教育自由化（規制緩和）」路線を両輪として、進められてきました。子どものさまざまな発達態様と、教師によるペダゴジー（教授内容と方法）の関連を明らかにし、教育政策が子どもにどんな帰結をもたらしているのかを引き続き検討します。教育政策の方向の妥当性を問う基礎的データを得ることができるのです。

⑥社会的競争の仕組みを検討する

もし、学力や学歴の社会的格差や職業的配分の社会的格差が、家庭的背景などの人々の努力の及ばないメカニズムによって生み出されているとすれば、私たちの社会は、人びとの努力と結果が公平に将来に影響するような社会（メリトクラシー社会）とは言えません。社会での競争において、一部の特権的な人びとは初めから優位な位置におり、それに対して、過大な努力を強いられる人びとがいるとすれば、それは不平等な社会にほかなりません。

JELS は①から⑤の検討を通じて、現代日本社会における人々の地位達成のあり方、社会的資源配分のあり方に関して、精度の高い観察と、家族、教育、職業社会を包括したインプリケーションを得ることが期待できます。そこから「幻想としてのメリトクラシー社会 日本」を描き出し、現在の社会的競争の仕組み自体に検討を加えることも、JELS に期待されることの一つなのです。

2）JELS の調査設計



※Cエリアでは、Wave 1 は 2004 年、Wave 2 は 2007 年に実施。

3）調査の内容

JELS ではこれまで次の調査を実施してきました。

質問紙調査

・児童・生徒質問紙調査（小学校３年生、６年生、中学校３年生、高校３年生）

①学習行動と意識　授業の理解度　教科の選好・有用感　授業タイプ　興味・関心の所在　成績の自己評価　成績アスピレーション　能力評価

②学校生活　遅刻・欠席の頻度　部活動参加　学校適応

③学校外生活　逸脱的な行動　文化的活動・接触　家庭学習頻度・時間　学校外学習機会（通塾等）こづかい・アルバイト収入　消費生活

④進路意識　卒業後の進路希望　希望する学歴　職業希望　内定進路（高３）　求職活動（高３）進路指導の状況（高３）

⑤自己概念・価値観・社会観　自己尊厳　結婚観・性役割　社会観（競争、公平感など）　社会的成功の要因

⑥家庭・家庭的背景　家庭の雰囲気　文化的資本　保護者の学歴期待

・担任教員質問紙調査

①教育目標・指導上の課題　学年の学習教育目標　学習指導上の課題　学級運営上の課題

②クラスのようす

③学習指導　授業のタイプ　授業方法で重視していること　宿題指導　評価

・保護者質問紙調査

学力調査

・算数／数学学力調査

アチーヴメント・テスト（AT）

パフォーマンス・アセスメント（PA）

・国語学力調査

教員対象ヒアリング調査

・担任教員ヒアリング調査

・進路指導教員ヒアリング調査（高校３年生）

・教務担当教員ヒアリング調査（高校３年生）

4）学力調査の特徴

①多様な「学力」の測定

学力調査（国語、算数／数学）では多様な「学力」の測定を目指しています。指導要領に準拠した「学業達成」だけでなく、パフォーマンス・アセスメント（PA）や新学力観にもとづく学力など、多様な「学力」の測定を試みます。

②思考や解決のプロセスを測定

PA と従来のテストとの違いは、従来のテストが答えを測定していたのに対して、PA では思考・解決のプロセスや表現の仕方（パフォーマンス）を測定する点にあります。思考や解決のプロセスは、新学力観の導入以後、教育目標や学習活動として重視されるようになってきていますが、それに合った評価方法はまだ十分に開発されているとはいえません。PA はそうした評価方法として、近年、注目されているものです。

③学力の規定要因を解明

また、児童・生徒質問紙調査や、担任教員調査、保護者調査のデータと学力をクロスさせることによって、児童・生徒の学習意識・行動、学校外学習、家庭の文化的環境、教員の教授方法などと学力の関連を検討することができます。

④子どもの学力の変化の原因を究明

時系列的な追跡調査によって、同一の児童・生徒の学力の変化が明らかになるとともに、その変化を規定する社会的・文化的要因の影響も浮かび上がることが期待されます。

新しい学力測定の例　（算数・数学　パフォーマンス・アセスメント）

小3PA 問題の例
土曜日の子ども会に 20 人の児童が参加しました。12 個のりんごと 15 個のバナナがおやつとして準備されていたので、一人が教室の片側からりんごを、もう一人が反対側からバナナを順番に一人ひとつずつ配って行きました。どの子どもも少なくともひとつの果物を受け取りました。果物はすべて配られたとしたら、何人の子どもが２つの果物を受け取ったでしょうか。どのように考えたのか、分るように説明しなさい。

（資料提供：日本大学工学部　鈴木京子氏）

5）研究成果とデータの還元

①研究成果は、『JELS 報告書』などの学術図書として、あるいは市販図書を通じて、学会のみならず広く社会的に発信します。

②私たちが行う調査研究は、文部科学省によるグローバルＣＯＥ事業の趣旨に則り国際的な学術研究拠点の形成に資するものである必要がありますが、同時に、研究成果を教育現場等に還元するという観点から、調査にご協力をいただく教育委員会等の行政機関にとって、また学校教育現場にとって、有用なデータを提供する責務を負うと認識しています。そのため、次のような情報・データを提供いたします。

(1)児童生徒調査の集計結果
(2)学力調査の集計結果
(3)校内研修等での結果の報告

③研究結果は、個別児童生徒名はもちろん、個別学校名も特定できない形で公表いたします（お茶の水女子大学附属学校に限っては学校名を特定）。

JELS2003 での結果報告会

2004 年 6 月　Ａエリア　小中学校校長説明会
11 月　お茶の水女子大学附属学校　セミナー
12 月　Ｂエリア　高校校長説明会
2005 年 3 月　Ｃエリア　小中学校校長説明会
5 月　Ｃエリア　高校教員説明会
9 月　Ａエリア　小学校校長説明会

JELS2006 での結果報告会

2006 年 7 月　Ａエリア　小中学校校長説明会
7 月　Ａエリア　高等学校校長説明会
8 月　Ａエリア　算数・数学ＰＡ学力調査講習会
2007 年 9 月　Ａエリア　小中学校校長説明会
11 月　Ａエリア　小中学校教員説明会

資料　結果速報（パンフ）例（お茶の水女子大学附属小学校６年生）

COE PROGRAM
Ochanomizu University
お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム
「誕生から死までの人間発達科学」
http://www.hss.ocha.ac.jp/coehp/index_j.htm

JELS
Japan Education Longitudinal Study 2003
青少年期から成人期への移行についての追跡的研究

>>>小学６年生版<<<
2004 年９月　No. 1

➢第１回調査の結果 速報

このパンフレットは、昨２００３年の秋から冬にかけて、お子様のご協力を得て実施した、「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究」（JELS 2003）の結果の中から一部を、紹介するものです。

☛調査全体の概要

お茶の水女子大学附属の小学校、中学校、高等学校に在学する、小３、小６、中３、高３児童生徒を対象に、①児童・生徒アンケート、②学力調査（国語、算数・数学）、③担任教員アンケート、④保護者アンケートを実施します。子どもたちの学力および進路形成過程を総合的に把握し、家庭生活や学校教育との関係を明らかにすることが目的です。

	配布数	回収数	回収率
小３	118	117	99.2%
小６	127	123	96.9%
中３	135	132	97.8%
高３	118	112	94.9%

☛今後の調査研究の予定

２００４年　保護者アンケート（郵送）
子どもたちの家庭生活の様子や、保護者のみなさんの意識などについてお尋ねします。子どもたちの学力や、進路計画に、家庭の状況はどんな影響を与えているのでしょうか。これらの点について明らかにしていきます。

２００６年　第２次青少年調査（郵送）
２００３年秋の時点で調査対象となった子どもたちの３年後を追いかけます。学校生活への適応度、学力、進路計画、価値観などは、３年間でどう変わるのでしょうか。また２００４年春に高校から就職した青年たちの、職業定着状況も調査します。

今後も引き続き、調査結果を、ご協力いただいたお子様、保護者の皆様に、お届けしていく予定です。

☛お問い合わせ・住所等変更等のご連絡先

この調査では、個人情報保護のため、一切のデータ収集や調査対象者に関する情報の保存・保護を、株式会社日本リサーチセンターに委託しています。下記までご連絡ください。

株式会社　日本リサーチセンター　調査部郵送調査グループ　担当：土井・大澤
〒104-0032　東京都中央区八丁堀 3-12-8
TEL：0120-030-551（平日 10 時～17 時（12 時～13 時除く））

お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム
JELS2003（プロジェクト３）
牧野カツコ、耳塚寛明
URL: http://www.hss.ocha.ac.jp/coehp/index_j.htm
FAX: 03-5978-5935　E-mail: JELS-ocha@li.ocha.ac.jp

Ⅰ　国語学力調査の結果

ＣＯＥ国語問題は、知識や理解力を大切にしながらも、同時により高い認識力、想像力、思考力、判断力という要素を重視しました。

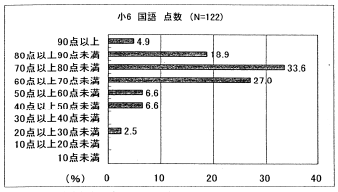
説明的文章と物語の読解問題では、書かれている内容・表現等を正確に理解する力だけではなく、前後の文脈や全体構成から、より深い解釈や推理をする力があるかどうかを問う設問を作成しました。また、書かれている内容について、主体的に評価し判断する力を問う設問も位置付けました。

語彙の問題では、知識だけでなく、論理や意味を深く理解する力まで問う設問を作成しました。文法も、知識だけではなく、そこから論理や意味の微妙なニュアンスや差異を見分ける力も重視しました。

書くことに関する問題でも、内容を正確に記述する設問だけでなく、与えられた条件の中で、情報の意味を前後の文脈や全体構成から推理・解釈・判断しながら短文を書くという設問を設定しました。

漢字問題は、学習指導要領に準拠しつつ作成しました。が、機械的な暗記だけでなく、同音異義語を見分ける問題、どこを漢字にしたらいいかを自ら考える設問も作成しました。

音声に関する問題を、今回の問題では明確に位置付けました。実際の生活場面での音声によるやりとりをＣＤで再現し、それを聞きながら答える問題です。音声問題についても、推理・解釈、主体的判断という要素を重視しながら設問を作成しました。



結果を見ると、まず音声問題については、話し合いの概要を把握することはよくできていました。ただし、話し合いで出された根拠以外の根拠を自分で考え見つけ出しながら答える設問に対して、やや弱さがありました。日ごろから自分で根拠・理由を見つけ出すという思考訓練が必要であると言えます。

説明的文章問題では、ことがらが文章に書かれているかいないかを問う設問はよくできていました。また、自分の主張を表明するという設問は予想以上によく出来ていました。しかし、主張の根拠となる記述を、文章全体の中から正確に見つけ出すカが不十分でした。文章全体を見渡して、その書かれ方や表現の特徴を問う設問に、対してもやや弱さがありました。

物語問題では、一つ一つの内容を読みとる設問についてはよく出来ていました。が、広い範囲の文脈をとらえた上で答えなければならない設問については、弱さが見られました。作品の形象を貫く全体的な傾向などが十分にとらえられていないのです。

語彙・文法問題は、全体としては高い出来でした。が、「言わぬが花」のような慣用句の設問、「しなやか」のように比較的日常では頻度の高くない語彙についての設問、またある表現を受け身に直す設問などに、弱さがありました。

作文問題も、全体的に良好な出来でした。ただし、具体例を挙げつつ説明する必要があるのに具体例を挙げなかったり、逆に具体例を挙げただけで説明が不十分であったりという答えがありました。ある意見に反対するという設問も、それなりに答えられていましたが、説得力という点でまだ物足りなさがありました。

漢字問題も、読み・書きともに良好でした。が、「講演」といった同音異義語の設問に弱さが見られました。

全体を通して良好な出来でした。小学校６年生としての国語力が、しっかりと身についていると言えます。が、文章全体・作品全体を俯瞰しながら、大きな論理のあり方、表現のあり方を把握することに、やや弱さがあるようです。また、自ら理由、例、反論を考えながら、的確に表現していくことについても、やや物足りなさがあります。日常の生活や読書でも、授業でも、そういった要素を重視していくことが必要です。

小６　正答率(%)

問番号	内容	平均値	最小値	最大値
大問１	話すこと･聞くこと	82.9	43	100
大問２･４	読むこと	64.8	9	100
大問３･５･６	言語事項	80.6	30	100
大問７	書くこと	94.1	25	100
国語の通過率(全体)		78.1	29	98

Ⅱ　算数学力調査の結果

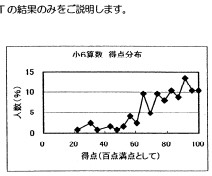
１）算数学力調査の特徴――ＡＴとＰＡの２部構成

今回の算数の学力調査は、アチーブメント・テスト（AT）とパフォーマンス・アセスメント（PA）という２部構成になっています。AT は、みなさんがよくご存知のテストに似たもので、答えだけ、選択式（５つの選択肢から答えを選ぶ）や簡単な記述式（答えだけ、または答えと式・理由などを書く）です。一方、PA は、思考のプロセスや算数的なコミュニケーション能力など、これまでのテストでは測定しにくかった力を測定するための新しい方法です。こちらの方は自由記述式で、しかも式と答えだけでなく図や絵などさまざまな表現方法を使って、自分の思考のプロセスを表現することを求めています。問題はかなりの長文で、たった１問なのに解答時間は 20 分もあります。このように、違ったタイプのテストを組み合わせることで、お子さん方の算数の学力を総合的に把握しようというのが今回の調査のねらいです。ただし、PA の方は採点に時間がかかり、まだ結果が出ていません。そこで、ここでは、AT の結果のみをご説明します。

２）ＡＴの結果

小６の AT の問題は全部で 23 問で、時間は 40 分でした。大きく分けると、【1】は計算問題、【2】～【14】はそれ以外の問題です（どの問題も１問１点）。この AT の結果をまとめたのが下の２つの図表です。

上のグラフは、正答数が０～23 のそれぞれの子どもの割合を示しています（ただし、グラフでは、得点は百点満点に直してあります）。得点のカーブは大きく右に偏っており、正答数が 15～23（百点満点で、65.2～100 点）のところに大きな山があります。ただしその一方で、左側にすそ野が広がり、数は少ないながら得点の低い子どもがいるのが気になります。今回の調査では、よく理解していないと正答できない問題が多く出題されていましたので、学力の差がはっきり出てしまったのかもしれません。



下の表は、問題ごとの通過率（正答した子どもの割合）を示しています。お子さんの学力の中身を知るには、何問正答したかより、どの問題ができ、どの問題ができなかったのかの方がより重要です。【1】の計算問題はどれもよくできています。【9】は計算問題以上に通過率が高くなっていますが、これは九九表の空欄を推論する問題でした。計算に関する基本的な問題はきちんと解けるようになっているようです。

N=125

大問	小問	内容	通過率
【1】	(1)	四位数の減法	89.6
	(2)	小数の減法	92.0
	(3)	小数の乗法	92.0
	(4)	小数の除法	93.6
	(5)	混合算（減法・除法）	88.8
	(6)	分数の加法	90.4
	(7)	分数の乗法	92.0
	(8)	分数の除法	92.0
	(9)	乗法逆	92.0
【2】		小数のわり算の意味(作問)	△55.2
【3】		割合の文章題	62.4
【4】		位取りの概念	74.4
【5】		2つの円の面積の比(倍)	67.2
【6】		分数の積・商の大小関係	75.2
【7】		帰納的推論	△61.6
【8】		三角形の高さの意味	66.4
【9】		九九表の意味にもとづく推論	○97.6
【10】	(1)	分数の概念	△52.0
	(2)		△53.6
【11】		商と余りの意味	84.8
【12】		線対称	92.8
【13】		容積の推移律	68.8
【14】		表の読み取り、概算	77.6

○＝やさしかった問題
△＝むずかしかった問題

下の表は、問題ごとの通過率（正答した子どもの割合）を示しています。お子さんの学力の中身を知るには、何問正答したかより、どの問題ができ、どの問題ができなかったのかの方がより重要です。【1】の計算問題はどれもよくできています。【9】は計算問題以上に通過率が高くなっていますが、これは九九表の空欄を推論する問題でした。計算に関する基本的な問題はきちんと解けるようになっているようです。

では、逆にむずかしかったのはどういう問題でしょうか。特にむずかしかったのは【2】と【10】(1)でした。【2】は「ものの値段と長さを使って、式が 300÷1.5 になる文章問題を１つ作りましょう。」という問題です。例えば、「1.5m で 300 円のリボン、1m の値段はいくらでしょう？」というような問題を作れれば正答です。しかし、わり算をいくつかに分ける演算とだけとらえていると、このような小数でわるということの意味が理解できなくなります。【10】は分数の意味が理解できているかどうかをみる問題です。(1)では 2m のひもを４等分したとき、(2)では３等分したときの長さを m で答えるよう求めました。「ひもの長さが 2m であることに注意して」と書いておいたにもかかわらず、(1)では「1/4m」、(2)では「1/3m」という誤答が多くみられました。「全体の 1/4 だけど、m で表した長さは 1/2m」ということが理解されていないのです。また、△はついていませんが、【3】や【8】の通過率の低さも気になるところです。【3】は３割引きで 420 円安くなっている商品の定価を問う問題、【8】は斜めにおかれた鈍角三角形の高さがどこかを記入させる問題ですので、もっと高い通過率が期待されます。

全般的に、計算に関する基本的な問題はよくできますが、しっかりとした意味の理解が要求される問題になると、通過率がやや低くなります。複雑な問題が速く解けるようになることより、概念をよく理解した上でじっくり考えながら問題を解く習慣をつけて欲しいと思います。

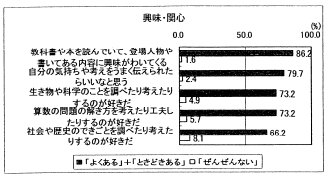
Ⅲ　児童アンケートの結果

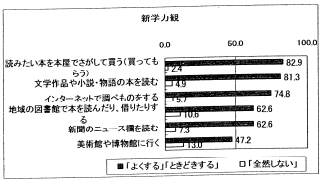
児童アンケートでは、学校での生活や学習の様子、家庭での学習の様子などについて答えてもらいました。

１）学校生活の様子

◆「学校は楽しい」89.4%

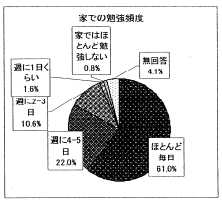
６年生では「学校は楽しい」という項目について、「とてもあてはまる」あるいは「まああてはまる」と回答した子どもは 89.4%にものぼりました。一番好きな授業として子どもがあげたのは「体育」32.5%でした。大きく差が開いて「音楽」14.6%、「理科」11.4%、「算数」と「図画工作」は同率で 10.6%となっています。





◆授業を受けていて感じること

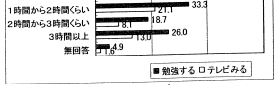
新しい学力観のもとでは、単に知識を暗記したり、計算を素早くしたりすることだけではなく、授業を受けていて感じる興味や関心を大事にしています。今回の調査からも、授業を受けていろいろなことに興味を示している様子がわかります。



２）家庭生活の様子

◆家で「ほとんど毎日勉強する」61.0%

１週間に何日くらい、家で勉強するかをたずねた質問では、「ほとんど毎日勉強する」という子どもは 61.0%でした。同じ質問をした３年生では、「ほとんど毎日勉強する」48.7%ですから、学年があがるにつれて毎日勉強する子どもが増えているといえます。では勉強時間はどうでしょう。もっとも多いのは「１時間から２時間くらい」33.3%、次いで「３時間以上」26.0%でした。



◆56.1%がテレビは１時間以内

ふだん、テレビをみている時間がほとんどみない子ども も含めて１時間以内という子どもは 56.1%にものぼりました。けれども、「３時間以上」みている子どもが 13.0%おり、家庭生活の様子に少しうかがいがでてきています。

に変わってくるのか、あるいは変わってこないのか。私たちは２年後の調査で明らかにしたいと考えています。

全体的に、子どもたちは学校生活を楽しく過ごし、家庭ではよく勉強しているといえます。勉強時間について、「１時間から２時間くらい」という子どもと、「３時間以上」という子どもとに分かれているのは、女子高につながる附属であるという本校の特徴によるものかもしれません。さて、今回みたような傾向は、今後、中学校生活でどのように変わってくるのか、あるいは変わってこないのか。私たちは２年後の調査で明らかにしたいと考えています。

6）人権・プライバシーへの配慮

国際水準にある研究成果を出し、現場でも有用な質の高いデータを集めるために、児童・生徒の質問紙調査だけではなく学力調査、担任教員調査、保護者質問紙調査を組み合わせて、児童・生徒の発達とそれを取り巻く社会・文化的環境についての包括的な情報を得る必要があります。

①質問紙への記名の必要性

児童・生徒の発達について知るためには、時系列的な追跡調査を行わなければなりません。JELS では小学校３年生が職業生活に入るまでの追跡調査を予定しています。追跡調査では、児童・生徒の前回の調査結果とつぎの調査結果を合致させることが必要になるため、質問紙や学力調査への記名、また誕生日や電話番号などの必要最小限の情報が必要となります。さらに、調査結果の報告や保護者への調査を郵送するため、住所を記入してもらうことも必要です。

②家庭的背景をたずねる質問の必要性

児童・生徒の発達に影響するさまざまな環境を把握する必要があるため、家庭的背景についても必要最小限のデータも得る必要があります。

③プライバシーへの配慮

日本における学術的な調査研究においては、残念ながらこれまで、調査対象者の人権を擁護し、プライバシーに配慮するシステマティクな態勢が、必ずしも十分に整備されているとはいえない状況にありました。

私たちはこうした現状に鑑み、諸外国における研究倫理やプライバシー保護の状況を蒐集・検討した結果、「お茶の水女子大学 COE 研究倫理委員会」を立ち上げ、すべての調査研究をこの委員会における審査を経た上で実施する態勢を整備しました。

研究倫理委員会において審査の対象となっているのは、次のような事項です。

(1)研究の社会的な意義
(2)個人的属性等、プライバシーに抵触する情報収集の必要性の評価
(3)人権擁護、プライバシー保護の観点から見た、調査方法、成果公開方法の妥当性
(4)データの管理態勢（情報漏洩を防ぐ態勢）

本調査は、データの収集、管理、公表等すべてについてこの規定に基づいて実施しています。

さらに、研究者自身が研究倫理への十分な配慮を行うことはもとより、調査実務はプライバシーの保護制度に適合する認定を受けている調査会社に委託し、個人情報保護法にもとづき、個人名、学校名の保護に最大の配慮を行っています。

2. JELS2003,JELS2006 調査と研究成果

1）JELS2003、JELS2006 調査の概要

Ａエリア　関東地方

JELS2003

2003 年　小学３年生、６年生、中学３年生、高校３年生対象質問紙調査
担任教員質問紙調査

2004 年　2003 年児童・生徒質問紙調査対象者の保護者質問紙調査

JELS2006

2006 年　小学３年生、６年生、中学３年生、高校３年生対象質問紙調査、
質問紙調査対象者（小６、中３）の保護者質問紙調査

2003	学校数	配布数	回収数	回収率(%)	2006	学校数	配布数	回収数	回収率(%)
小3	14	1161	1118	96.3	小3	14	1205	1165	96.7
小6	14	1202	1164	96.8	小6	14	1275	1260	98.8
中3	8	1128	1057	93.7	中3	8	1244	1163	93.5
高3	10	1969	1438	73.0	高3	10	2309	2044	88.5
保護者	—	3058	920	30.1	保護者	—	2428	1133	46.7

Ｂエリア　東北地方

JELS2003

2003 年　高校３年生対象質問紙調査

	学校数	配布数	回収数	回収率(%)
高3	7	1414	1077	94.4

Ｃエリア　東北地方

JELS2003

2004 年　小学３年生、６年生、中学３年生、高校３年生対象質問紙調査
担任教員質問紙調査、調査対象者の保護者質問紙調査

JELS2006

2007 年　小学３年生、６年生、中学３年生、高校３年生対象質問紙調査、
質問紙調査対象者（小３、小６、中３）の保護者質問紙調査

2003	学校数	配布数	回収数	回収率(%)	2006	学校数	配布数	回収数	回収率(%)
小3	21	935	921	98.5	小3	30	1103	1017	92.2
小6	21	974	962	98.8	小6	30	1104	996	90.2
中3	8	1022	968	94.7	中3	11	1148	915	79.7
高3	6	1194	1150	96.3	高3	6	1015	950	93.6
保護者	—	4125	1512	36.7	保護者	—	3355	2913	86.8

お茶の水女子大学附属学校

JELS2003

2003 年　小学３年生、６年生、中学３年生、高校３年生対象質問紙調査
担任教員質問紙調査

2004 年　2003 年調査対象者の保護者質問紙調査

JELS2006

2006 年　小学校６年生、中学３年生、高校３年生対象質問紙調査、
質問紙調査対象者（小６、中３）の保護者質問紙調査

2003	配布数	回収数	回収率(%)	2006	配布数	回収数	回収率(%)
小3	118	117	99.2	小3	-	-	-
小6	127	123	96.9	小6	131	130	99.2
中3	135	132	97.8	中3	132	130	98.5
高3	118	112	94.9	高3	117	109	93.2
保護者	484	298	61.6	保護者	263	181	68.8

2）研究成果

刊行報告書

『JELS 第１集　2003 年基礎年次調査報告（児童・生徒質問紙調査)』2004
『JELS 第２集　国語学力調査報告』2004
『JELS 第３集　算数・数学学力調査報告』2004
『JELS 第４集　細分析論文集(1)』2005
『JELS 第５集　中学校・高等学校学力調査報告』2005
『JELS 第６集　お茶の水女子大学附属学校　学力調査報告』2005
『JELS 第７集　2003 年基礎年次報告書（児童・生徒質問紙調査、保護者質問紙調査)』2006
『JELS 第８集　Ｃエリア基礎年次報告書』2006
『JELS 第９集　Ｃエリア算数・数学学力調査報告』2007
『JELS 第 10 集　細分析論文集(2)・Ｃエリア国語学力調査報告』2007
『JELS 第 11 集　ＡエリアWave2 調査報告』2008
『JELS 第 12 集　海外学会発表レポートおよびＣエリア Wave2 調査報告』2009

これまでの知見（一部）

①家族、家庭生活、価値意識、自尊感情について

(1)子どもの家庭状況･価値意識･自尊感情の学年･性別比較を行った。学年進行と共に、親は「勉強しなさい」という「勉強をみる」など直接的な教育指導を行わなくなり、「勉強部屋」などの環境設定に重点を置く傾向があった。子どもの認知する「家庭の雰囲気」には、「ほとんど毎日「勉強しなさい」といわれる」ことが負の影響、「自分の家では、食事を大切に考えている」、「家の人は、近所づきあいを大切にしている」ことが正の影響を優位に与えていたこと、「家庭の雰囲気」と子ども自尊感情が有意に相関していたことを明らかにした。

(2)子どもの家庭生活状況･通塾状況・「家庭の雰囲気」の学年･性別比較を行った。その結果、男子は「経済的支援」、女子は「人との交流」を自分の家庭で重視していると評価していたが、小６･中３という時期は、「家庭の雰囲気」、受験塾や家での勉強頻度に性差はみられず、性別による家庭生活の差が少ない時期であることが明らかになった。

②職業意識形成

⑴子どもが特定の「しごと」をやりたいという理由について、「好き（だから）」「人のため（になる）」「夢（だから）」という３つのキーワードに注目し、これらの言語的資源の利用がどのような問題を孕むのかを考察した。考察の結果、以下の２点を指摘した。1)「好き」を理由にしたり、「やりたいこと」が他にあると主張したりするこれらの言語的資源は、個人の内在的な動機であるがゆえに、他者からの介入を困難にするという点に問題があることは先行研究でも指摘されているが、とりわけ職業意識の発達過程にある小中学生にとっては、結果的に放任されることにより、職業についてこれ以上深く考えない（＝判断停止）可能性があるという点でより問題が大きい。2)また、「しごと」を志望する理由として特徴的に「好き」や「人のため」という言語的資源を用いる割合が高い「しごと」があり、特定の集団がそれを志向する傾向がある場合、その帰結には重大な違いが生じる可能性がある。

⑵Ａエリアの小中高校生のデータを用い、子どもの職業観を親の職業に対する見方から探り、性別によって意味づけがどのように異なるのかを明らかにした。結果、男子の方が母の「しごと」に関心が薄い一方、女子の方が親の「しごと」を認識してもそれに向き合うことが少なく、自分の好みや興味に従って「しごと」を「評価」する傾向にあった。このような性別差は、将来の生活に影響がある恐れがあると指摘した。

⑶子どもの職業志望の理由として「好きだから」という言説が、特定の職業を志望する者、とりくに性別に偏って用いられることに注目し、「好きだから」言説が感情労働と女性性に非常に適合的であることから、キャリア教育で子どもに好きなものだけを追求させることは、問題があると指摘した。

③学力・家庭的背景・進路について

⑴ＡエリアとＣエリアの比較検討結果によれば、学力形成過程のありよう、とりわけ家庭的背景との関連は、地域によって一様ではない。これまで、学力形成の社会的メカニズムを明らかにして、家庭的背景と学力の結びつきに警鐘をならしてきた。しかしながら、それらの結果は、もっぱら大都市圏およびその周辺都市における調査結果に基づくものであった。たしかにＣエリアにおいても父学歴は学力の重要な規定要因ではあったが、受験塾を欠くこの地域では家庭的背景が学力に対する決定的な影響力を持つとはいえない。この意味で、われわれが発してきた警鐘がけっして無意味なものだったとはいえないにせよ、その範囲は限定されねばならない。私立中学校の有無、そこへの進学準備の必要性、それに対応した家庭の教育戦略（特定の階層に対してアスピレーションを鼓舞）等に関する地域的環境の差異が、学力形成過程の決定的な差をもたらしていると考えられる。このことは学力形成を介した人々の社会的地位達成過程に大きな地域差があることを予測させる。

⑵Ａエリアにおいて、AT は家庭での学習時間（個人の努力）のみならず、家庭的背景（父学歴）によって、また受験塾への通塾の有無ときわめて強い相関を持つ。受験塾通塾が、一定の家計水準を必要としまた強い学歴期待と結びついていることを考慮すると、AT 的テストによる選抜は、家庭の経済的・文化的条件による選抜だといってよい。（AT によって測定された）学力は、家庭的背景の代理指標である。この意味で、AT に準拠した学力選抜は、社会階層再生産の一翼を担うメカニズムを構成している。既存の学校教育制度は地域的多様性を持つが、とりわけ大都市圏とその近郊のそれは、AT 的テストによって選抜されたこの意味での高学力者を実質６年制中等教育機関によって庇護し、進路選択と将来の可能性を差異化し、格差を拡大する結果をもたらしている可能性がある。

雑誌・新聞

JELS 調査はつぎのようなメディアでも取り上げられています。一部をご紹介いたします。

朝日新聞（朝刼）2004.12.26　６面

新聞　2004年(平成16年)12月26日　日曜日　12版▲　◎　6

新テストで「学力」チェック

子どもの学力が低下しているという指摘が重なる中で、新しいタイプのテストの開発が続いている。今月相次いで発表された国際学力調査や、文部科学省の調査が、子どもの成績を通じて教育政策を検証するためのものなら、新テストは子どもがどこでつまずいているかを調べ、学習に生かすためのもの。問題を解くプロセスに注目しているのが特徴だ。（氏岡真弓）

COMPASS

どこでつまずくか診断

JR大森駅に近い東京都大田区立入新井第一小学校。20日、5年生がテストに取り組んだ。

「算数・数学力構成要素型診断テスト（COMPASS）」という。東京大学大学院「基礎学力研究開発センター」が、文科省の「21世紀COEプログラム」の研究の一環として開発した。

子どもは、課題ごとに決まった時間で解く。

「普通の試験のように全部の問題を一度に解くと、白紙の時、時間不足でやらなかったのか、考えたのに解けなかったのかわからない」と開発責任者の市川伸一教授。

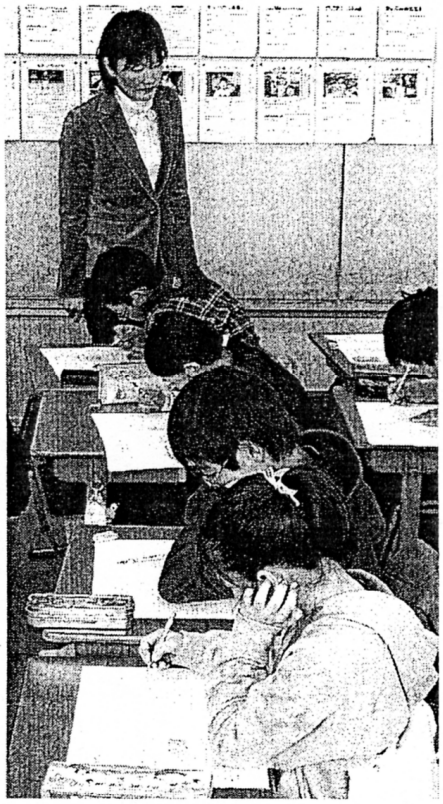
特徴は実施方法だけではない。「数と式」「図形」などの内容ではなく、問題を解くプロセスに注目した点にある。

子どもたちがどこでつまずくかを診断するため、設問はプロセスを分解してつくってある。用語の定義とその具体例を書かせる▽表やグラフを完成させる▽消しゴムを使わずに文章題を解かせ、図表の使い方を見る▽計算を工夫して素早く解かせるなどいろいろだ。アンケートでは、予習・復習などの日常の学習のしかたや「問題文に線を引く」などの解き方の工夫を尋ねた。

たとえば「関数が苦手」と一口でいっても、どの段階が弱いかで対策が変わる。市川教授が小中高校生の学習相談活動を10年余り重ねて感じたのは、そのことだった。

試作版をこの3月、首都圏の小学5・中学2年の計約500人に実施。その改訂版を今月から1月にかけて約600人に解いてもらっている。

「教科書をしっかり読まないためか、用語の理解が不確か。図や表を自発的に書かない、計算で工夫をしないなどの子が多いことが改めて見えてくる」と市川教授。「子ども一人ひとりに結果と助言を返している。教員の授業改善のヒントにもなるはずだ」と語る。



「COMPASS」に取り組む子どもたち＝東京都大田区立入新井第一小学校で

PA

思考過程まるごとみる

紙いっぱいに絵が、図が、数字が書いてある。「一つとして同じ答案がない。読んでいると一人ひとりの子と対話しているよう」と京都大学高等教育研究開発推進センターの松下佳代教授。

松下教授はお茶の水女子大の「21世紀COEプログラム」で算数・数学学力調査のリーダーを務める。そのなかで普通のテストとともに行ったのが「パフォーマンスアセスメント（PA）」だ。

PAは欧米で広がっている評価法で、問題を解く過程を式や言葉、絵など多様な方法で表現させる。COMPASSがプロセスを分解して問題をつくるのに対し、PAは思考過程をまるごと見ようとする。「演技や演奏（パフォーマンス）の評価に似ている」と松下教授。正解でも考える筋道のたどれない答案と、誤答でも筋道が見える答案では、後者の方が得点が高くなる場合もある。

設問は日常的な場面を使った物語仕立て。小学校6年生の問題だと、骨子はこんなふうになる。

〈子ども会のハイキングでゆう子さんのグループは3キロ、あきお君のグループは5キロのコースを歩くことになった。10時に分かれ、ゆう子さんのグループは11時に目的地に着いた。あきお君のグループはその30分後に到着した。2人はどちらが速く歩いたかでもめている。どう考えるか〉

この考え方を20分かけてB4の紙1枚に表現する。

答案評価の物差しは速さの概念がわかっているか、絵や図も使ってどう説明できているかなどの採点基準だ。採点しながら基準を検討、改訂してまた採点し直すだけに手がかかる。「作業は大変だが、教師に学力を把握する力がつくと思う」と松下教授。「数学の評価は客観的で点数化しやすいものに偏りがちだが、PAはそんな学力のとらえ直しを迫る」と話す。

予備調査は昨夏で、小学3・6、中学3年生549人が回答。本調査は10月から今年3月、小学3・6、中学3、高校3年生計約4千人が答えた。

プロジェクト全体のリーダーであるお茶の水女子大の耳塚寛明教授が普通のテストとPAの得点を分析したところ、普通のテストの方が保護者の学歴や受験塾通塾の有無と強く結びついていた。

「PAは家庭的に恵まれない子に福音をもたらす可能性がある」と耳塚教授。「文科省は全国学力調査を検討中だが、方法によって見える学力が違ってくる。どんな学力を評価するかから議論すべきだ」と語っている。

内外教育

2004年（平成16年）9月21日（火）　第5508号
（購読料金　月額税込み4,200円）　（台併号）

●昭和21年12月12日　第3種郵便物認可●毎週2回(火・金曜日発行(但し祝日等を除く)●発行所　東京都中央区銀座5丁目15番8号
時事通信社 電話(03)6800-1111●〒104-8178©時事通信社2004

時事通信社

目　次

●「見えない学力」を多面的に評価
—児童の思考プロセスを把握—
日本教育社会学会第56回大会（上）……2～4

〈世界の動き〉
急増するスペシャリストスクール
教育水準の引き上げ目指す新しい種類の
中等学校・英国……5～7

〈文部科学省の2005年度予算要求〉
②初等中等教育
義務教育負担金は現行制度前提に要求……8～13

〈特集〉第20回「教育奨励賞」候補校の実践
⑲愛知県立古知野高等学校……14～16
⑳和歌山県印南町立真妻小学校……16～17
㉑東京都北区立王子小学校、同王子中学校
……18～19

〈Let's Try！総合学習〉
プレゼン能力高める小論文講座
栃木県立佐野高等学校……20

〈アンテナ・スポット〉……21～26

〈手づくり教材教具拝見〉
信州大学教育学部附属長野中学校……27

〈わたしの学校経営〉
平野禎亮・佐賀県鳥栖市立鳥栖北小学校長…28

〈授業を創る〉
近藤富男・兵庫県立芦屋国際中等教育学校教諭
……29

〈新刊案内〉……30～31

〈ラウンジ〉河村プラン……32

価値的理解

東京学芸大学教授●児島邦宏

ある山村の小さな中学校を訪れた時のことである。「この学校の生徒の特色といったら、どんなところにあるのでしょうか？」——この問いに、教師の反応は大きく二つに分かれた。

「ここの生徒は、全くだらしなくて、遅刻はするし、物忘れも多い。注意しても、ニタニタしているばかりで、言うことは聞かないし……」というのが一つの評価である。

「ここの生徒は、大物ですよ。屈託がなくて、何事もマイペースですよ。教師にビクビクしたりしません。こういう生徒の中から、大人物が生まれてくるような気がします」というのが、もう一方の評価である。

どちらの評価が正しいか、ということではない。おそらくどちらも正しいだろう。だが、同じ生徒を見ていながら、評価は全く逆向きになってしまっている。一方は「だらしない」と言い、他方は「屈託がない」とみている。

この違いは、その学校の教育の方向を、全く変えてしまう。「だらしない」というとらえ方から出発した教育は、その是正を目指す。忘れ物もなく、きちんとした生活態度を求める。

「屈託がない」という見方から出発した教育は、この「良さ」をどう生かし、伸ばしていくかに力を入れる。物おじすることなく、マイペースで生きていくことを応援する。

教育とは、全く厄介な仕事だと思う。それ以上に、人が人を育てることに恐れを抱いてしまう。子供をどうみるか、どうとらえるかによって、一八〇度その方向が逆になってしまうことがあるからである。

ある子供観、価値観を持って、子供を見ているわけである。かといって、この問題を乗り越える術があるわけでもない。

私たちの子供の理解とは、ある価値観に基づいていること、それを絶対視したとき、場合によっては押し付けになること、そのことを自覚する必要がある。

■2004年（平成16年）9月21日　内外教育　第3種郵便物認可

「見えない学力」を多面的に評価

—児童の思考プロセスを把握—

●日本教育社会学会第56回大会—(上)

日本教育社会学会第五十六回大会が十一、十二日の両日、仙台市の東北大学で開かれた。同大会の模様を三回に分けて紹介する。

第一回は、耳塚寛明お茶の水女子大学教授と諸田裕子同大学21世紀COE（卓越した研究拠点）プログラム研究員による「学力・学歴・進路」。従来型テストでは見えてこない児童の思考プロセスを多面的に評価できるテストを実施したところ、従来型のテストで好成績を出せない児童の中にも、思考プロセスでは優れた結果を出す児童がいることが明らかになった。また、多面的なテストで把握される学力が、学力全体の基盤になっている可能性があることが分かった。

通塾などはさほど影響せず

調査対象は、関東地方の一市にある十四の小学校の六年生千二百二人で、回収率は96・8％。児童に対しては、二〇〇三年十～十二月に、国語、算数の学力調査とアンケート調査を実施。保護者と担任教員へのアンケート調査も実施した。今回発表したのは算数の結果に関する分析。

学力調査で実施したのは、従来型のペーパーテスト（アチーブメントテスト＝以下ＡＴ）と、思考プロセスや算数的なコミュニケーション能力などを把握するためのパフォーマンスアセスメント（以下ＰＡ）。六年生対象のＰＡは、時間、距離、速さに関する問題を、式や答えだけでなく理由や考えたことなどを含め、図や絵なども使いながら、十分な時間をかけて解答させた。問題用紙には、答えが正しくなくても、考え方が正しく書けていれば点数が得られることなどを明記した。

ＰＡの解答の評価は、①概念的知識②手続き的知識③推論とストラテジー（方策）④コミュニケーション——のそれぞれについて、「示されていない＝0」「低＝1」「中＝2」「高＝3」の四段階で行った。具体的には、「時間と距離に関する情報に着目しているが、正しく取り出せていないので『概念的知識』は一点」「考え方は十分説明されているが、数学的言語の使い方が不十分であるので『コミュニケーション』は二点」などと評価している。ＰＡの評価について諸田研究員は、「『関心・意欲・態度』を測定するものではない。解法に無意味な絵や図は評価の対象とはならない。ＰＡは、従来型のＡＴとも『新学力観』による評価とも違う。重要な点は、いくつもの方法を同時に採用して、『学力』を多次元で把握していくことだ」としている。

従来型のＡＴの正答率の平均は41・3％だった。正答率の分布は、「30％以上40％未満」の19・5％をピークに山型になり、最低の「10％未満」は3・8％、最高の「90％以上」は2・8％だった。

一方、ＰＡの素点の分布は、ピークが「一点」と「十二点」の二つある形になった。具体的には、零点5・6％、一点15・4％、二点7・3％、三点6・2％、四点6・5％、五点6・8％、六点3・8％、七点4・1％、八点3・2％、九点3・5％、十点5・0％、十一点7・2％、十二点25・6％（四捨五入のため計は100％にならない）で、平均は六・五点。

次に、アンケート調査とＡＴの正答率を関連させた分析。児童を正答率で「10％未満」から「90％以上」までの十段階に分け、各段階の児童が平日に学校外で勉強する平均の時間をみると次のよ

うになり、正答率60％を超えるあたりから勉強時間が急速に増えていた。（単位分）

10％未満	二八・二
10％以上20％未満	二九・七
20％以上30％未満	四一・三
30％以上40％未満	四八・八
40％以上50％未満	四九・七
50％以上60％未満	四五・九
60％以上70％未満	六七・七
70％以上80％未満	七六・〇
80％以上90％未満	一三五・〇
90％以上	一五〇・〇

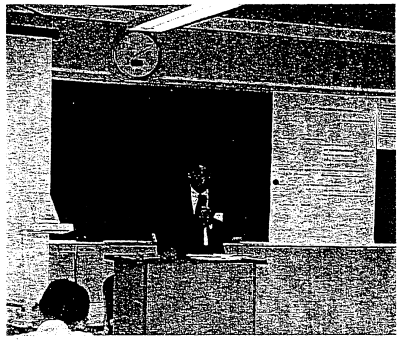
受験を目的とする塾に通っているかどうかとの関係をみると、通っている者の得点分布は正答率「90％以上」のグループが21・9％で最も多いのに対し、通っていない者は正答率「30％以上40％未満」（21・0％）をピークとする山型になるなど、得点分布に明確な違いが現れた。

また、父親が大卒か非大卒かでみると、大卒の者のピークは「40％以上50％未満」（20・1％）、非大卒の者のピークは「30％以上40％未満」（20・6％）であるなど、全般に父親が大卒である者の方が高得点を得ている。

つまり、従来型のATの結果は、勉強時間や通塾の有無、父親の学歴などの要因によってかなりの程度左右されるということになる。

一方、PAの結果をATの場合と同様に十段階に区分して平日の平均学習時間と関連させてみると次のようになった。ATの場合は、ほぼ点数が

■2004年（平成16年）9月21日　内外教育　第3種郵便物認可



学力調査の分析結果について発表する耳塚教授

上がるにつれて勉強時間が長くなる傾向が明らかだったが、PAではそうした明確な関係はみられなかった。（単位分）

10％未満	三八・六
10％以上20％未満	三九・三
20％以上30％未満	四九・七
30％以上40％未満	四八・六
40％以上50％未満	五三・九
50％以上60％未満	四七・一
60％以上70％未満	三八・一
70％以上80％未満	六三・〇
80％以上90％未満	六〇・〇
90％以上	七〇・四

受験塾に通っているかどうかによる差をみると次のようになり、「10％未満」や「90％以上」の割合で差が出たが、全体としてみるとATほどの明確な差は現れなかった。（単位％）

	（非通塾）	（通　塾）
10％未満	21・6	6・4
10％以上20％未満	7・5	1・3
20％以上30％未満	6・0	2・6
30％以上40％未満	6・9	3・8
40％以上50％未満	7・0	7・0
50％以上60％未満	8・4	8・3
60％以上70％未満	3・4	2・6
70％以上80％未満	3・5	3・8
80％以上90％未満	4・7	5・7
90％以上	31・2	58・6

父親の学歴との関係も通塾の有無と似たような分布になり、大卒と非大卒の差はATの場合ほど明瞭（めいりょう）ではなかった。

学歴期待の低い家庭に出現

ATの正答率とPAの得点の分布から学力のタイプ別に児童を分類したところ、①ATもPAも平均的なタイプ（平均型、全体の25・3％）②いずれも高得点のタイプ（上位型、同20・1％）③いずれも低得点のタイプ（下位型、同30・8％）④ATは低いがPAは高得点のタイプ（「PA高AT低」型、同23・7％）――の四タイプに分類できることが分かった（「PA低AT高」型はいない）。耳塚教授は、「『PA高AT低』型は、従

来型のATでは平均以下の学力水準と見なされるが、PAのような評価・測定方法を行うことによって高学力と分類されるタイプだ」としている。

各タイプのうち、上位型と下位型の特徴は明確で、まず上位型が多く出現しているのは、学習時間が長く、父親が大卒で、受験塾に通っている児童群。逆に、下位型に多いのは、学習時間が短く、父親が非大卒で、受験塾に通っていない児童。

これに対し、「PA高AT低」型は、こうした観点からは明瞭な特徴がみられなかった。学習時間の分布は、上位型よりは下位型に似ていた。父親が大卒である者の比率は、上位型の55・1％、下位型の19・1％、「PA高AT低」型の37・7％で、「PA高AT低」型は中間に位置する。受験塾に通う者の割合は、上位型が39・1％、下位型が4・3％、「PA高AT低」型が7・2％で、学習時間と同様、「PA高AT低」型は下位型に近い。

耳塚教授は、児童が「PA高AT低」型となる背景として「学歴期待の低い家庭から出現すること」と「学校あるいは教員に原因があること」を仮説として提示している。

学歴期待に関係するアンケート項目との関連をみると、「この一カ月の間にお父さんやお母さんに勉強を見てもらったことがある」という児童の割合は、上位型47・6％、「PA高AT低」型36・2％。「家の人に博物館や美術館に連れて行ってもらったことがある」という割合も上位型71・6％に対し、「PA高AT低」型は55・5％と低め。耳塚教授は、「『PA高AT低』型は、子供の教育に対する保護者の関心などが相対的に低い家庭から出ている」としている。

父親が非大卒の児童のうち、保護者が子供に大学卒業を期待しているという児童は、上位型では55・4％、「PA高AT低」型では35・8％。つまり上位型の方が高学歴を期待されている割合が高い。父親が大卒でも同様で、上位型は63・7％、「PA高AT低」型は55・0％。

父親が非大卒で、小学校卒業後に私立や国立の中学校への入学を期待している割合は、上位型が22・8％、「PA高AT低」型が5・5％。父親が大卒では、上位型が41・9％、「PA高AT低」型が2・0％だった。

同様に、児童自身の学歴期待や自己の成績に対する期待も上位型より「PA高AT低」型の方が低かった。

授業タイプやクラスにより差

調査対象となった十四の小学校ごとに「PA高AT低」型が占める割合をみると、最低は17・2％、最高は35・3％で、学校によってかなり差があることが分かった。

また、担任に対し、「自分で調べたり考えたりする授業」をどの程度行っているかを聞いた結果と、各学力タイプの児童が占める割合の関連をみると次のようになり、こうした授業が多いほど「PA高AT低」型と下位型が多く、少ないほど上位型が多くなった。（単位％、「高・低」は

■2004年（平成16年）9月21日　内外教育　第3種郵便物認可

「PA高AT低」型を表わす）

	（平均型）	（上位型）	（下位型）	（高・低）
多い	19・6	18・5	35・4	26・5
やや多い	25・5	17・8	31・0	25・7
やや少ない	28・7	26・6	27・3	17・5

さらに、同じ小学校の四つのクラスについてみると次のようになり、クラスによって大きな差が生じる場合もあることが分かった。

	（平均型）	（上位型）	（下位型）	（高・低）
クラス1	22・6	19・4	16・1	41・9
クラス2	18・2	40・9	22・7	18・2
クラス3	27・5	34・5	17・2	20・7
クラス4	40・0	3・3	16・7	40・0

耳塚教授は、「AT的テストによる選抜は、家庭の経済的・文化的条件による選抜だと言ってよい。これに対してPA的テストによる選抜は、家庭的背景の点で相対的に恵まれない子供にも福音をもたらす可能性がある」と強調。さらに「『PA高AT低』型は析出された（存在する）が、（その逆の）『PA低AT高』型は析出されなかった（存在しない）」と指摘し、そこから論理的に導かれる推論として、「『学力』全体が、『PAによって測定される学力』を下部構造とし、この上に『ATによって測定される学力』が上部構造として乗っていることが考えられる。そう考えることによって、PAが低ければATは高くなり得ず、PAが高い場合にのみATが高くなり得る現象が理解できる」としている。

（伊豆倉　哲＝内外教育編集部）

読売新聞（朝刊） 2004.9.12 38面

)04年(平成16年)9月12日(日曜日) 讀賣新聞

お父さんと同じ仕事「イヤだ」

中3の7割

つまらなそう／夜遅く帰るから

中学三年生の約七割が「親と同じ仕事に就きたくない」と考えていることが、お茶の水女子大の耳塚寛明教授らの研究グループの調査で分かった。東北大で十一日開かれた日本教育社会学会で発表された。〝拒否反応〟は小学生より強く、親の仕事を知らない生徒も見受けられた。

調査は昨年秋、関東地方のある市で、公立の小学校三年生、同六年生、中学三年生の計約三千三百人を対象に行われ、「将来、父親や母親と同じ仕事をしたいか」「どんな仕事がしたいか」などを聞いた。

この結果、中三では72%が「父親と同じ仕事に就きたくない」と回答。母親の仕事についても、64%が否定的にとらえた。小三は60%と50%で、学年が上がると数値が高くなった。

理由は「つまらなそう」「夜遅く帰ってくるから」などがトップ。「自分の道を行きたい」「ほかにやりたいことがある」などがこれに続いた。

父親の仕事を「分からない」「知らない」と答えたのは中三で5%。母親の仕事も3%が内容を知らなかった。

一方、就きたい仕事は、小三で「スポーツ選手」や「パンや菓子の製造作業者」など身近な職業が上位。中三は「保育士」「教師」「デザイナー」などが人気で、「リストラなどでクビにならないから公務員」といった現実的な声もあった。

中三では「未定・何もしたくない」も7%に上り、進学校や高校の専門学科を希望する生徒に比べ、一般的な「普通科高校」を希望する生徒にこの傾向が強かった。

学校現場では近年、子どもたちの職業意識を高めるキャリア教育が注目されており、同グループは「今回の調査結果を踏まえ、どのような職業教育が有効か模索したい」と話している。

「何してるか知らない」5%……

＊お茶大調査

読売新聞（朝刊） 2004.9.14 1面

編集手帳

万葉研究で知られる江戸後期の国学者、鹿持雅澄は長男が生まれた時に歌を詠んでいる。「父に似て餓鬼とな成りそ大寺の金剛力士の姿とをなれ」。わしのようなやせっぽちではなく、仁王さまの堂々たる姿におなり、と◆歌人佐佐木幸綱さんの「男うた女うた―男性歌人篇」（中公新書）に収められている。「親を超えて大きく育て」という語りかけは、いつの世にも通じる〝男うた〟であろう◆雅澄の歌に照らせば、頼もしくもあり、少々さびしくもある。お茶の水女子大の研究グループによれば、調査した中学三年生の72%が「父親と同じ仕事には就きたくない」と答えたという。先日の日本教育社会学会で発表された◆子供は子供、好きな分野に身を投げ出せばいい。そう考えているお父さんも、「つまらなそう」「夜遅く帰ってくるから」が理由の最上位に並んだと聞けば心境は複雑だろう◆父親が職場で何をしているか、「分からない」「知らない」子供も5%を数えた。働く姿を見せられないのが勤め人とはいえ、どうやら家族の会話も足りないようである◆佐佐木さんにも〝男うた〟があった。「父として幼き者は見上げ居りねがわくは金色の獅子とうつれよ」…。夜は酔い、朝は朝で浮かない顔をしていても、君らの知らない場所で輝く金色の獅子もいるのだ、子よ。

資料　グローバルCOEプログラムについて

グローバル COE プログラム　国際的に卓越した教育研究拠点形成のための重点的支援

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻は、平成 19 年度からの５年間、文部科学省より「グローバル COE プログラム」に採択され、『格差センシティブな人間発達科学の創成』をテーマとした、国際的な研究拠点形成事業に取り組んでおります。心理学、教育科学、社会学などの複数の学問領域が連携して、発達の時間軸を貫く格差の再生産構造を浮かび上がらせるとともに、その解明と構造転換への道筋を探究することをめざすとともに、この領域での国際的な研究拠点を形成することが目的です。

「グローバル COE プログラム」は、平成 14 年度から文部科学省において開始された「21 世紀 COE プログラム」の評価・検証を踏まえ、その基本的な考え方を継承しつつ、我が国の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、国際的に卓越した研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的とする事業です。平成 19 年度には 63 件のプログラムが採択されています。

グローバル COE プログラムの研究教育拠点の選定基準

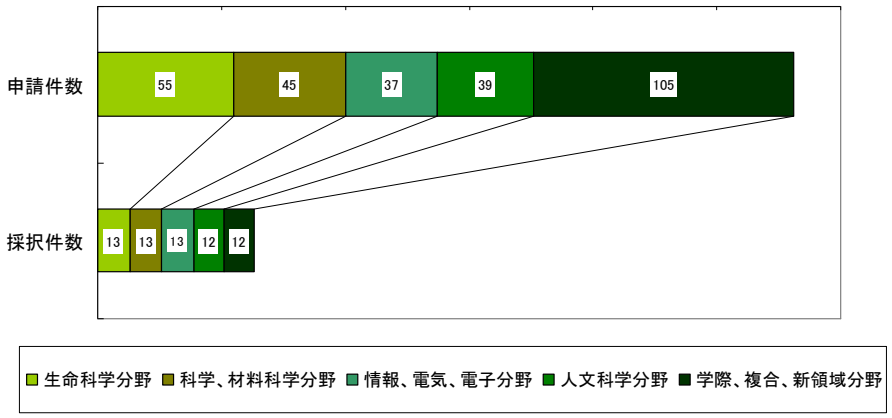
①学長を中心としたマネジメント体制による指導力の下、大学の特色を踏まえた将来計画と強い実行力により、国際的に卓越した教育研究拠点を形成する計画であること。

②このグローバルCOEプログラムで行う５年間の事業が終了した後も、国際的に卓越した教育研究拠点としての継続的な教育研究活動が自主的・恒常的に行われることが期待できる計画であること。

③研究プロジェクトではなく、世界最高水準の優れた研究基盤や特色ある学問分野の開拓を通じた独創的、画期的な研究基盤を前提に、高度な研究能力を有する人材育成の機能を持つ教育研究拠点（人材養成の場）を形成するものであって、将来の発展性が見込まれる計画であること。

④２１世紀ＣＯＥプログラムに採択されている拠点については、２１世紀ＣＯＥプログラムで期待された成果が十分に得られていること。

⑤他の大学等（国内外の研究機関を含む）との連携による取組については、拠点となる大学及び将来的な拠点構想が明確となっており、その連携が拠点形成に必要不可欠であること。



＊グローバル COE プログラム　ウェブサイト

http://www.jsps.go.jp/j-globalcoe/index.html

お茶の水女子大学
Ochanomizu University